



二人だけの修学旅行



別句通 <bekkutooru>

二人だけの修学旅行

「ちょっと疲れたね」

遼は歩きながら学生服のズボンのポケットから几帳面に折りたたんだハンカチをとって、彩菜の額にうっすら浮かぶ汗をふきとってやった。

彩菜はややとまどいつつ笑みを浮かべて「休む？」と言った。

「うん」

遼は頬が緩んだ。二人は歩みを止めて、歩道わきの水路の柵によりかかった。

「静かで落ち着いた街だね」

彩菜はやや上目がちに遼の気持ちをまさぐるような眼差しを向けた。「建物の意匠がみんなきちんと統一されているね」遼は顔を水路の向こう岸に広がる屋並みに向けた。

「みんなと一緒に来たかったね」

彩菜の語尾は風に吹き消される線香花火のように弱々しく途切れた。

「うちの学校は卒業式の間近に修学旅行するんだもんな。仕方がないさ」

そう言った後、遼の口は何かを呟いたような気がしたが、声にはならなかった。

「遼君、好きな人いないの？」

やおらそう言って彩菜は眉を少し吊り上げた。

遼は少しはにかんで彩菜のほうを振り向いて、「彩ちゃんは？」と訊いた。

彩菜はうつむき、風に翻らせないように学生服のスカートを抑えて「うん。今はいない」と応えた。少し間をおき「僕も」と云った遼は再び向う岸の屋並みに目をやった。

「修学旅行も今日で終わりだね」

「うん」

まるで独り言を呟きあっているかのように言葉がはかなげに水路の水面に落ちて流されていた。

なだらかに広がる緑にあふれた丘陵がどこまでも広がっていた。青く澄んだ空はまるで海を天へ逆さにしたようだった。

丘陵には無数の小さなモニュメントが等間隔で無数にしつらえてある。そして櫂の並木が両袖に続く一つの石畳の道が白亜の豪華な校舎へと続いている。

「遼くん」やや猫背気味に歩いていた遼は背後から届いた彩菜の声に振り向いた。

「おはよう」

彩菜は遼のその言葉には返事をせずうつむいたまま遼の隣を歩く。太い櫂並木と陽光が、並んで歩く二人を陰と光に塗り分けた。

「卒業だね」

やや間を置き彩菜は「うん」とうなずいた。

遼は歩きながら道の外に広がる無数の純白のモニュメントに目を細め遠い眼差しを送った。

「とうとう二人だけなんだね」

遼は感情をクローゼットにしまって鍵をかけたような声で精いっぱい言った。

彩菜は何か言おうと遼のほうを瞳孔が開くくらい悲しげな視線を送った。

仰々しく校名と回数と日にちの彩字をしたがえた『卒業式』の垂れ幕の下で壇上に教師と思しき大人たちが厳かに椅子に腰をかけ、二人だけの学生服姿の遼と彩菜を睥睨している。

初老で髪を茶褐色に染めた校長はもったいぶった調子で話している。

「この3年間よく耐え励み学び、あなたがた二人はここにいるのです。そう、一緒に入校した多くの生徒諸君の分までです」

まるで校長の虚ろな声の響きを吸い取っていくように、講堂の窓外の無数の白いモニュメント達までが式に参加しているようだった。

遼と彩菜は瞬きも身じろぎもせず床に視線を落とし立ち続けている。「そして、ついにこの日が来たのです」そう言って校長は1枚の紙を両手で掲げた。

「ここに1枚の卒業証書があります。あなたたちのいずれかがこの栄えある我が校の卒業生となり、巣立つのです。それでは最後の『課題』にのぞんでください」校長はそう言って、にこやかに結んだ口元を広げた。

遼と彩菜は体の向きを変え対峙し、お互いに寂しげな目線を合わせた。了

二人だけの修学旅行

<http://p.booklog.jp/book/75530>

著者 : bekkutooru

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/bekkutooru/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75530>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75530>

*本作品はフィクションです。実際の人物・団体・事象等とは一切関係がありません。

*本作品の2次利用は無償とします。ご利用される方はmail@gkcircuit.comか

若しくは<https://twitter.com/bekkutooru>

にツイート等してご一報下さい

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ